はじめに

入試の現代文で問われていることは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順

……文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる**　→　**テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テスト現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわる**ことが多い）。**ただし選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

1　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり0点）

2　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

3　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ1点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

4　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、1点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a

	人	間	は	…

→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b

…	…	…	こ	と

→　※**句点なし！**（1点減点）

設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則

ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c

…	…	…	こ	と。

→　※**句読点は一文字分！**（1点減点）

より本質的な解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○対比の表現（ＡではなくＢである）！
○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意

……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇐ 心身
語句 ← 心身の一体性
一文・文 ⇒ 心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。

（例）**心身**の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り**……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け**失敗の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り**……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。

3 **正しい対比喪失の誤り**……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断**……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断**……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断**（不当な当為判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7　**部分的指摘の誤り**　……本文中では、**「AともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8　**記述に反する誤り**　……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9　**記述なし**　……………文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10　**文脈喪失の誤り**　……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11　**物理的スリカエの誤り**　……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12　**比喩を文字通りに解釈した誤り**　……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランCをオススメします。

プランA……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランB……映像のチャプター１（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランC……第三講までプランBで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランA
プランD……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、AとBを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランA、奇数の講義ではプランBというように

予習の時間＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講はその１が八分、その２が十二分、なお国公立大学など記述問題を含む講では二十五分が基本となります）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンCがオススメです。

パターンA……右の基本時間通り
パターンB……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンC……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率
（例えば第三講なら全部で十三題）

○　私大………………（第一講その1・三講・四講・七講・八講・九講・十三講・十四講・十七講・十八講・十九講・二〇講・二十三講・二十四講）→**六十五％以上**
○　国公立大…………（第六講・十一講・十六講・二十一講）→**五十五％以上**
○　共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その2・二講・五講・十講・十二講・十五講・二十二講）→**八〇％以上**
○　復習問題…………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。 勉強したような気になるだけで、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Z会）……試行調査2回分＋オリジナル2回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。
『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Z会編集部（Z会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。
『Z会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『入試精選問題集7　現代文』（河合出版）……難関私大および国公立大二次向け

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方＆解き方が面白いほど身につく本』（KADOKAWA）

教材選定について

- 有名難関大学の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（日本文化論・科学論・歴史論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目次

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》……p.10
入試現代文の導入　その２《小説》……p.12
第二講　日本文化論……p.19
第三講　情報化社会論……p.25
第四講　近代化論……p.30
第五講　小説その２　物理と心理……p.35
第六講　学問論……p.43
第七講　歴史論……p.48
第八講　現代社会論……p.53
第九講　民俗学……p.58
第十講　小説その３　日常と非日常……p.64
第十一講　科学技術論……p.71
第十二講　芸術論……p.76

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》

　ウソが本来どれほど無邪気なものであったかは、子供を実験していると自然にこれを認めることができると思う。ウソをつき得る小児は感受性の比較的鋭い、しかも余裕があって外に働きかけるだけの活力をもった者に限るらしいから、一つの学級でも一人あったりなかったりするほどに稀である。もちろん手ごたえがあるたびにその念慮は強くなり、技術も進んで悪用の端を開くことであろうが、それにしたところで彼等のウソは［Ａ］ものであった。私の試験に供した五歳の女の児などは、笑って聴いていると止めどもなく出鱈目（デタラメ）を重ねて行ったが、あべこべにこちらがそれを信じたような顔をすると、慌てて「今のはウソなのよ」と言って念を押した。これがもう少し大きな児になるとうっかり深入りしてつい「ウソだッ」という機会を失うらしいが、そんな場合には内心大いなる不安を感ずるようである。この［Ｂ］時もしくは加減というようなものは、文字にこそ現わせないが誰にでも測定し得るもので、従って知りつつその限度を踏み越えて行くところに、そこに善悪の岐路は示されているかと思う。我々は必ずしも今後も無差別に、ウソを礼讃しなければならぬ必要はない。ただもう少し多くの同情をもって、ウソつきが泥棒になって行く経路を、考察してやるのがよかったのである。

　歴史的にこの沿革を見ると、以前はウソつきは一つの職であった。業とまでは言えない村々のおどけ者でも、常に若干の用意と習熟とがあり、誰にもまねのできない抜きん出た一人はよく知られ、それを特長として人からも承認されるのみか、少しく技能が衰えるとたちまち取って替ろうとする者が現われるなどは、いずれもその地位の偶然でなかったことを思わせる。即ち名声をもって［Ｃ］形の報酬としていた点だけは、学者文人などとも大して異なるところはなかったのである。

（柳田国男『不幸なる芸術』）

問１　空欄Ａに入る最も適当な語を、次から選べ。

イ　深い　　ロ　清い　　ハ　良い　　ニ　ひどい　　ホ　まずい

問２　空欄Ｂ・Ｃに入る最も適当な語（漢字一字）を楷書で書け。

問３　次の文は問題文の論旨の前提となっている同じ論文中の別の箇所からの引用である。空欄Ｘ〜Ｚに入る語の組み合わせとして最も適当なものはどれか。あとに掲げるイ〜ホから選べ。

たとえば秋田のバク、米沢のテンツ、越後のドスや関東のチク、それからもっと広く行われているジラ・テンポ・テンボウの類も、自然に覚え込んだ土地人でないと、的確にその内容を捉えることは難しいが、それがすこぶる戯言というものと、似通っていたことだけは想像し得られる。現在はもちろん標準語のウソという語の成長と呼応して、これにも若干の複雑性を加えたかも知れぬが、とにかくどこの田舎に行って見ても、今はまだウソと［Ｘ］と、もしくは［Ｙ］と［Ｚ］と、即ち笑うべき虚言（ソラゴト）と憎むべき虚言（キョゴン）との、二つ別々の名詞の併存を必要としているのである。

イ　Ｘ…イツワリ　　Ｙ…デタラメ　　Ｚ…ゴマカシ
ロ　Ｘ…イツワリ　　Ｙ…ゴマカシ　　Ｚ…デタラメ
ハ　Ｘ…デタラメ　　Ｙ…イツワリ　　Ｚ…ゴマカシ
ニ　Ｘ…デタラメ　　Ｙ…ゴマカシ　　Ｚ…イツワリ
ホ　Ｘ…ゴマカシ　　Ｙ…イツワリ　　Ｚ…デタラメ

第一講　入試現代文の導入　その２《小説》

次の文章は、井伏鱒二（いぶせますじ）の小説『朽助（くちすけ）のいる谷間』の一節で、「私」の祖父がかつて所有していた山の番人である朽助というハワイ帰りの老人と、その孫のタエトという混血の少女が住んでいた谷間の家が、ダム工事のためにいよいよ水没することになった場面である。

まる四日ほど雨が降りつづいた。そして五日目に晴れて、谷間の樹木は最も明快な緑色を示した。伐採夫達は四日間で彼等の目的を達して、五日目の晴天には斧（おの）の音を響かせなかった。全く彼等は短い期間で手際よく彼等の任務をはたしたものである。山腹の樹木は、堤防と同じ高さまで一本も残らず刈りあげられてしまった。そこに池の水をすっかり乾かした時の姿を現して、谷間としては最後の姿であったのだ。私と朽助とは堤防の草の上に立って、すっかり形相を変えた谷間の風景を互いに驚き合った。

「ああはや、なんたる事じゃろ！　さては大きな池ですがな！」

「ここから見ると、五つの谷しか見えない」

山腹の曲線は、樹木の伐採線によって、五つの湾曲を示していたのである。朽助は私の観察を否定して、左側の突き出た峰のかげに更に四つの谷間があることを教えてくれた。

「（注）ではやはり魔物が住むね？」

「A住みますとも！　今にも魔物が住みそうですがな」

樹木を伐り払われた急斜面は灰色の地肌を見せ、池の底となるべきところは赤土のゆるやかな勾配（こうばい）であったのだ。その中心を谷川が流れていた。この過渡期の池は、殆（ほとん）ど池としての魅力を現していなかった。考えようによっては、池が目をむき出して怒っているところではないかと思われた。そういう殺気立った池の水のない水底に、もとの朽助の家は取り払われないで建っていたわけである。私と朽助とは堤防から池の底に走り下りて、池の底の最も深い場所となるべきところを二人で歩きまわった。そし

て朽助は或る一箇所に立ちどまって、地面を見つめながら呟いた。

「魔物というものは、いっそここいらから涌いて出るのかもしれませんでがす」

二人の役人がいた。彼等は共に洋服の上衣を脱いで、人々を指揮した。そして二つの樋を閉じさせた。鉄のハンドルを回すと大小三つの歯車が急転して、芝居の緞帳ほどもある幅広な板が降りて来て、樋の口を閉鎖する仕掛けであった。谷川の水は水量を失っていなかったので、五分間もたたないうちに、谷川は自らの姿を氾濫する水のなかに没してしまった。私と朽助とはタエトと一しょに、一本の木立の下へ行って見物していたのである。朽助は、しきりに同じことをくり返して言った。世間というものがあさましいことになったなぞと言ったのである。

池の底には赤土の斜面に濁り水の池の姿ができはじめた。水面は極度に凪いで、それは水が急速度に増えて行っていることに対して冷淡な様子を見せたが、水岸では寄せ波ばかりの満潮の光景であった。

朽助達の住んでいた家は、段々畑の下で次第に孤独の度を深めて行った。すでに牛小屋も周囲の樹木も取り払われていたのであるが、何故か人々は朽助の住居にだけは破壊の手を遠慮していた。けれど朽助にとっては、人々の遠慮が却って悪かった。おし寄せて来る水は、空家の土間に侵入しはじめた。

そこで朽助は自分がその土間に立っているかのように周章てはじめたのである。

「これはしたり、津波が来たるぞ！　ああはや駄目なようでがす」

私は彼の絶望的にふりまわす腕を捕えて、彼に言った。そんなに大声で狼狽したりしては人々が嘲うであろうことを注意したのである。彼の手は私から腕をふりほどいて、人々の行為を大声で罵倒した。人々が朽助に反感をもって、彼の住居を水の底に沈めるつもりであろうというのであった。

「それはいっそ咎でがす！　ああ私らはつらいでがす！」

彼があまり大声を出したので、タエトは朽助の肩に親しみ深く手をかけて、片方の手で朽助の目を覆った。彼女の沈着なふるまいは、朽助を平静な人間に蘇らせ、同時に彼を快活な老人にさせた。そして彼はタエトに目を覆われたまま言った。

「これこそ、ご着眼だります。したれど、もう手を引っこめてもよろしいがな。私らは独りで目を閉じますでがす」

タエトが手を引っこめてみると、朽助は約束通り目を閉じていた。

池の水は朽助の住居にも容赦なく襲いかかって、戸を蹴やぶって侵入した。そして壁をひき剥いで、軒をひたした。やがて家全体が水の渦に囲まれながら、水中に姿をかくしてしまったのである。

「沈みましたわ」

タエトはそう言って、興奮の吐息をもらした。朽助が目を開いた時には、屋根の沈んだあたりの水面から、数本の柱が連続的に勢いよく突き出て来た。柱はそれ自体が一本の棒となって、全体の長さの三分の二ほども水面に姿を見せて屹立（きつりつ）したのである。そうして再び水のなかに潜る様子を見せながら水面に横たわり、流木となって慌ただしく水岸に沿うて走り去った。

水は、段々畑を襲いはじめた。段々畑にはまだ収穫期に至らない黍（きび）と棉（わた）とがあったが、黍は寄せ波の一撃によって、ひとたまりもなく抜きとられ、一束の苗となって押し流された。棉は真黄色の花や純白の綿毛の実をつけたまま、段々畑と一しょに水のなかに沈んだ。すでに池は二つの湾を持ちはじめていたのである。そして朽助の言うところによれば九つの湾を——九つの湾を持った池となるには数日を費やさなければならない筈であった。けれど谷間に見出すことのできる一つの湖水であったのだ。赤土色に濁った水は周囲の山と青空とを水面に映して、谷間の形相を和らげようとこころみた。

川しもの谷川で水の音がすっかり絶えると、朽助は耳鳴りがすると言いだして、しきりに彼自身の耳を引っぱった。二人の役人は、人夫達を連れて帰って行った。私や朽助は木立の下から現れて、堤防の上に出た。小さな立札があって、立札にはこの池の竣工祭は来月一日に挙行することが記してあった。

私達は立札の傍に腰を下ろして、互いに黙って池を眺めた。一羽の小鳥が池の水面をかすめて、おぼつかなげに飛びまわっていた。池はこの小鳥の住居を犯した化物なのであろう。小鳥は水面にうつる自分の姿に向かって細く鋭い悲鳴をあげたり、幾度となくはげしい羽ばたきをしたりした。そして再び水面から遠く離れたり、羽根をおさめて水面近くをかすめたりした。タエトは熱心に水面を眺めていたが、この小鳥はいまに飛び疲れてしまうであろうけれど、何鳥という鳥かわからないと呟いた。私は、この小鳥は多分うぐいすであろうと答えた。

夕方が近づいた。しかし小鳥は飛びまわることを止さなかった。池の水面は錆びた銀色にかげりはじめて、小鳥は細い黒色の一線を水面に描いた。彼は自分の羽音のきこえるかぎり、その羽音に興奮して彼自身を冷静にすることができなかったのであろ

う。

　朽助は言った。

「なんたるむごたらしいことをする池じゃろか！」

　タエトは石ころを拾い集めていたが、彼女は可憐な声をはりあげて、

「ほうい、ほうい！」

と叫びながら、小鳥をねらって石ころを投げた。五つ目の石が小鳥の頭上をかすめた。小鳥は驚いて絶望的な羽ばたきをしてみせたが、急速な放物線を描いて山腹の茂みのなかに消えてしまった。

　B私はタエトの石投げをする姿体を好ましく眺めた。

　朽助は足を半ば投げ出して、その脛の上に額をのせたが、彼は思いついたように嘆息をもらしはじめた。深く息を吸い込んで、一気に肩で押し出すというやりかたであった。どうやらその度ごとに彼は咽喉からひと思いにくったくした思想を棄てようとしているらしかった。そして吐き出した息と吸い込んだ息との語尾は、彼の五体の感傷にくすぐられて小刻みにふるえた。ところがそれは次第に老人のすすり泣きに変わって行ったのである。

　私は少なからず疲労を覚えていたので、いつまでも立ち上がりたくないと思った。

　タエトは私達の立ち上がるのを忍耐強く待ちつづけて、そして滅多なことには朽助を堤防の上に置き去りにしないという意気込みを鳶色の瞳に多分に現していたのである。

（注）「ではやはり魔物が住むね？」朽助は、「総じて一つの池に八つ以上の谷をふくんでいたるならば、その池には魔物が生まれるものでがす」と言っていた。

問１　傍線部Ａ「住みますとも！　今にも魔物が住みそうですがな」ということばには、朽助のどのような気持ちがこめられているか。その説明として最も適当なものを、一つ選べ。

①　自分の家を奪い、魔物が住みつきそうなまでに谷間の形相を変えてしまったダム工事を恨み憤る気持ち。
②　住み家を追われようとしている者の気持ちが理解できずに、気楽に話しかけてくる「私」をさげすむ気持ち。
③　ダム工事をしている人や「私」が魔物の存在についてはまったく無知なので、それを教えてやろうとする気持ち。
④　この谷間に魔物が住むようになることを恐れるとともに、そのようなことになるのを避けたいと思う気持ち。
⑤　ダム工事によって形相を変えられた谷間を見て殺気立ち、自分も魔物となって大暴れしたいという気持ち。

問２　傍線部Ｂ「私はタエトの石投げをする姿体を好ましく眺めた。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、一つ選べ。

①　タエトが朽助の気持ちを代弁するかのように、腹立ちまぎれに小鳥に向かって石を投げているのを見て共感し、心から応援したいと思っているからである。
②　タエトがおもしろ半分に小鳥をねらって石を投げているのはいけないことだと思ったが、彼女の姿体が美しいので思わず見とれてしまったからである。
③　小鳥が痛ましく哀れに飛んでいるのをあきらめさせようとしているタエトにやさしさを感じ、石を投げている姿体が美しく思われたからである。
④　タエトが小鳥を捕らえようとして石を投げているのには反感を抱いたが、危ういところで小鳥が逃げて行ったのでうれしくなって見ているからである。
⑤　小鳥が自分の住居を犯した池に向かってはげしく抗議しているのを見て、それを応援するように石を投げているタエトをほほえましく思っているからである。

第一講　知識モノ解説

文学史

●柳田国(國)男（一八七五～一九六二）
民俗学者　民俗学＝フォークロア→一般民衆の文化・風俗・習慣を研究対象にする学問
代表作品『遠野物語』『海上の道』

●井伏鱒二（一八九八～一九九三）
小説家　太宰治と親交の深かった作家
代表作品『山椒魚』『ジョン万次郎漂流記』『黒い雨』

語句

沿革＝えんかく→歴史・歴史的推移・移り変わり
周章＝あわてる・しゅうしょう→取り乱す
狼狽＝ろうばい→あわてる・取り乱す　cf「周章狼狽」

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）ライサンする　①参　②惨　③讃　④酸　⑤産

（イ）善悪のキロ　①期　②岐　③機　④帰　⑤軌

（ウ）力のカゲンをする　①化　②科　③加　④可　⑤架

（エ）ジャッカンの用意　①若　②弱　③惹　④寂　⑤尺

（オ）無形のホウシュウ　①醜　②秀　③宗　④収　⑤酬

次の語句の意味として最も適当なものを、次の各選択肢から選びなさい。

（カ）狼狽

①怒りをあらわにすること　②嘆き悲しむこと　③うろたえ騒ぐこと

④泣き声をあげること　⑤ほえたてること

（キ）着眼

①心がけのよさ　②視力のよさ　③見ものとしてのよさ

④目隠しとしてのよさ　⑤思いつきのよさ

（ク）おぼつかない

①頼りなさそうな様子　②つらそうな様子　③ぼんやりした様子

④悲しそうな様子　⑤恐ろしそうな様子

テキスト解答・解説

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り**……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け**失敗の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り**……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。

3 **正しい対比喪失の誤り**……本文中で「**Ａ↔Ｂ**」という対比で記述されているのに、無関係な「Ｃ」という要素を勝手にもちこんだり、「**Ｃ↔Ｄ**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断**……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断**……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょう）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断**（不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またＡとＢの特徴の比較をしているだけなのに、**Ａの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解「ウソは一種のお笑い芸である」「無邪気」「良いものではないが悪いものではない」

主な対比

敵役

世間の考え・一般論「ウソつきは泥棒の始まり」「ウソは悪いもの」

小さな対比

脇役

小さな対比・第三項「ウソを礼讃」「ウソは良い」

《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

筆者側のキーワードを答える問題です。したがって「無邪気」＝「悪くない・イノセント・無罪」、「小児」「子供」のウソと同種の言葉が入ります。したがってロの「清い」です。潔白で罪はないということ。刑事ドラマでも聞くように、極悪人に見えても「ヤツは白ですぜ」。ニ「ひどい」、ホ「まずい」など悪く言うのは、世間側の評価、一般論です。つまり対比混乱の誤りです。ハの「良い」は小さな対比ではありますが、やはり筆者の見解ではない対比混乱の誤りです。イの「深い」は、正しい対比喪失の誤りです。すなわち、あたかもこの文章が「深いウソと浅いウソ」を比べていたかのような間違った選択肢です。

問２《語彙知識に関する空欄補充》

Ｂ 空欄前後に類似する語がたくさん出てきます。「機会」「加減」「岐路」「限度」などの表現です。つまり、「そろそろネタばらしするタイミングだな」ということで、「潮時」となります。

Ｃ「名声」がどんな形の報酬、ご褒美なのかという問いです。実は隠れた対比が働いています。すなわち、一般的なご褒美は「お金・品物」など、ありあり物質的な「有形」のもののはず。ところが「ウソつき」芸人は、評判や名誉だけということですから「無形」となります。

問３《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

「ウソ↔X」「Y↔Z」「笑うべきソラゴト↔憎むべきキョゴン」と三回対比的キーワードを繰り返しています。整理すれば、筆者が無邪気で悪くないと言っている側「ウソ・Y・笑うべきソラゴト」vs 世間が悪く言う方「X・Z・憎むべきキョゴン」です。さて、選択肢に出てくる「イツワリ」「ゴマカシ」は本文中にはないことばです。一方「デタラメ」のみ「出鱈目」として本文中に登場します。しかも、悪気のない作り話という意味で。したがって、空欄の内、唯一筆者サイドのYに「デタラメ」と入ります。かくして選択肢としてはイと決まります。

模範解答

問１＝ロ　問２　Ｂ＝潮　Ｃ＝無　問３＝イ

第一講　入試現代文の導入　その2《小説》

《本文の対比構造》

主役

弱者に寄り添うヒロイン
＝孫娘のタエト
＝優しさをもち冷静さをもたらす役

主な対比

敵役

朽助じいさんとタエトの
二人の山での暮らしを奪うもの
＝ダム工事・役人＝魔物＝化物

小さな対比

脇役

家を奪われる者・タエトに救われる
者・怒れる者＝朽助・小鳥および朽
助と行動をともにする語り部の「私」

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

「家を奪われた者」朽助と「家を奪った者」ダム工事＝「魔物」との対比関係を問うている設問ですから、答えは①です。②は朽助を「私」と敵対的対比であるかのように扱った誤りです。両者は同一グループなのに。名付けて同一性分断の誤りです。③は「私」を敵役である「ダム工事」と同類に扱ってしまっています。グループが違うものを混ぜてしまっているのです。したがって対比混乱の誤りです。④はあたかも本当に「魔物」が住むかのような表現です。「魔物」は家を奪うものを比喩的に表現したものであって、火を噴くドラゴンかなにかのような実体ではありません。つまり比喩を文字通りに解釈してしまった誤り、比喩の誤解です。⑤は「自分も魔物となって」とあるように、やはり違うグループのものを混ぜてしまいました。対比混乱の誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

主役ヒロインであるタエトの行為に関する設問です。また「家を奪われた者」との対比（敵対ではないよ、「役」が違うということ）が重要です。まさにそれぞれの登場人物（小動物も含む）の役割ごとのグループ分けができたのかを受験生に問う設問です。なお、タエトが石を投げているのは、手が届かないからです。前半では朽助の目を手で覆い、「見るから興奮するのですよ、目を閉じて冷静になってね」という行動をとりました。それと同種の行為です。朽助と小鳥が似たものとして描かれているように、タエトの役割も一貫した優しさです。そのため③が正解です。①は「怒れる者」として朽助もタエトも一緒にされています。したがって対比混乱の誤りです。⑤も同様の誤りで、小鳥の「抗議」を「応援」するという形で火に油を注いでいます。タエトの役は寄り添いつつも「冷静さ」です。②はタエトの役設定を無邪気キャラ＝「おもしろ半分」キャラにしています。記述に反する誤りです。また後半の道徳的には「いけない」が、美学的に「美しい」という対比は本文の正しい対比喪失です。「私」の眼がいやらしいですね。④もタエトのキャラ設定を誤解しています。飛んでいる小鳥を石で獲物にできる野生児であるかのようです。「ダム工事＝文明　vs　野生＝タエト」というような展開になってしまいます。勝手にストーリー展開してはダメです。したがって、正しい対比喪失の誤りです。

模範解答

問１＝①　問２＝③

復習問題解答

復習問題解答　第一講

（ア）③　（イ）②　（ウ）③　（エ）①　（オ）⑤
（カ）③　（キ）⑤　（ク）①

解答漢字一覧

（ア）礼讃（礼賛）　（イ）岐路　（ウ）加減　（エ）若干　（オ）報酬